

親鸞の年代における表現変遷の理由

玉 木 興 隆

一 はじめに

親鸞の特に晩年期における表現変遷を考察する。先行研究では同名異本の比較によつて、当時の関東門弟による法義理解の動揺との関連が指摘されている⁽¹⁾。この論をうけ筆者は、同名異本の年代を時系列順に見ることによつて問題の展開、またはその起因となつた理由を考察できると考える。今回は特に、「慶喜」という文言を主題とする。詳細は以下に述べるが、この「慶喜」の文言は親鸞晩年期において、同時期に表現変遷が幾つか施されている。「慶喜」の文言の中で本研究では、特に「正信念仏偈」の讃銘部分を中心に見ていく。

二 教忍宛消息の「慶喜」の字釈について

親鸞の晩年期に「慶喜」の表現変遷の理由となつたと考えられる教忍宛消息には、

また慶喜とまふしさふらふことは、他力の信心をえて、往生を一定してんずとよろこぶところをまふすなり⁽²⁾。

と「慶喜」の字釈がある。この消息は「十二月廿六日」と日付の記録はあるが、年期の記載がない。先行研究では、年期推定の根拠は少ないが消息全体の主題として、一念多念、有念無念の話題であることから、建長三年もしくは七年のものと推測される。また、上の一文は前後の文章にかかわりなく突然挿入されているため、詳細は不明だが、現存していない教忍の質問状に「慶喜」について問いがあつたと想定される⁽³⁾。まず、年期推定の最下限を建長七年とした場合で考察する。

親鸞の著述もしくは、書写した書物中、「慶喜」の使用は十余例とそれほど多くない。また建長七年十二月二十六日以前に高田系の門弟である教忍が「慶喜」の文言を知ることの出来る書物はかなり限定される。それを挙げると国宝本・顕智本「浄土和讃」、建長本『尊号真像銘文』、専修寺本『教行信証』である⁽⁴⁾。以上は建長七年十二月二十六日以前に、高田

系の門弟に伝持された書物である。⁽⁵⁾ 教忍の当時の周辺状況から推察すると、この中から「慶喜」の文言を知り、親鸞に質問した可能性が高いと考えられる。次に、「正信念仏偈」の讃銘部分と教忍宛消息の関連性を中心に考えていく。

三 建長七年以後における「慶喜」の変遷

『尊号真像銘文』では建長七年六月二日から正嘉二年六月二十八日の三年の間に「慶喜」の字釈が増補加訂または変遷している箇所は以下の通りである。

・能発一念喜愛心といふは、能はよくといふ。発はおこすといふ、ひらくといふ。「一念喜愛心は一念慶喜の真実信心よくひらけ、かならず本願の実報土にむまるとしるべし。慶喜といふは、信をえてのちによるこぶころをいふ也。」

・獲信見敬得大慶といふは、この信心をえておほきによるこびうやまふひとといふ也。大慶は、おほきにうべきことをえてのちによるこぶといふ也。⁽⁶⁾

(建長本から正嘉本にかけてあった、増補加訂または変遷部分を波線部で挙げる。)

また紙数の都合上、紹介できないがこの三年間に年代の異なる『唯信鈔文意』諸本の五本中、光徳寺本・正月十一日本・正月二十七日本・正嘉本の四本が成立している。その『唯信鈔文意』の同名異本中、最も古い親鸞七十八歳の盛岡本誓寺本から比較しても、後の四本との間に「慶喜」の字釈の変遷

親鸞の年代における表現変遷の理由(玉木)

が見られる。⁽⁷⁾ このことは、親鸞が建長七年頃の教忍から受けた質問が影響して「慶喜」の字釈が変遷していったという傍証となるであろう。また正嘉本『尊号真像銘文』は顕智の伝持本であり、教忍は『門侶交名牒』によれば顕智の弟子であった。⁽⁸⁾ このことから建長本『尊号真像銘文』を見た教忍が親鸞に対して質問し、そのことによって親鸞が正嘉本における「慶喜」の字釈を増補加訂した可能性は高いと思われる。

以上から、建長七年に教忍から受けた「慶喜」の質問に親鸞が対応した結果、幾つかの「慶喜」の表現が晩年の同時期において変遷していったものと考えられる。

しかし、教忍宛消息を建長七年のものと考えたならば、「獲信見敬得大慶」部分の推敲は、教忍宛消息の建長七年十二月二十六日以前に三回は施されているという疑問が残る。また、この消息は先述したように年期記載がなく、推定根拠となるものは話題のみである。このことから、筆者はこの消息はもう少し年期が遡る可能性を考えている。

もう一つ、この教忍宛消息は建長三年のものであるという説がある。⁽⁹⁾ 次に年期の推定を建長三年の場合で考えていく。

四 教忍宛消息を建長三年と推定した場合の「慶喜」

上記に述べた様に、「獲信見敬得大慶」部分の推敲は建長七年十二月二十六日の半年前には三回施されている。そこで

親鸞の年代における表現変遷の理由（玉 木）

一五四

建長三年の場合を考えて、教忍宛消息とこの部分の推敲の関連性を見ていく。まずその推敲は、

A、見敬得大慶喜人 B、獲信見敬大慶人

C、獲信見敬得大慶 D、獲信見敬大慶喜

と以上のものが挙げられる。

Aは尊蓮書写本系統と言われる文明本にAの文言が残っていることから、尊蓮書写本系統の奥書の記す宝治元年以前にはこの文言であったと考えてもいいだろう。⁽¹⁰⁾

Bは坂東本『教行信証』だけに残る文言であり、後にCやDに推敲されている為、この文言のままである理由は分らないが、その最下限をCの文言に推敲された建長本『尊号真像銘文』の奥書にある建長七年六月二日としておく。⁽¹¹⁾

AからBの推敲はいつ頃施されたかは分からないが、愛知県妙源寺蔵の鎌倉時代書写とされる「尊号真像銘文断簡」には坂東本『教行信証』では抹消されている「見敬得大慶喜人」の文言が残っている。また安藤章仁氏は、この断簡を筆跡の字形から親鸞八十歳前後に書いたものを真仏が模写したものであると述べていることから、この年代付近までは、Aの文言であったと考えられる。⁽¹²⁾ また、AとBは讃銘部分ではないが、筆者はこれも讃銘との関連を考えている。理由として、坂東本『教行信証』『正信念仏偈』は改訂跡が多く残っているが、大半は、讃銘として用いられる「本願名号正定業」

「即横超截五惡趣」の二十句に集中していること、また「尊号真像銘文断簡」にはAの文言があることから、AとBも讃銘部分と関連していると考えられる。

Dの文言は、江戸時代の宝物記録である「宝曆十二壬午年六月三日御目録」の中に今は現存していない専修寺本『教行信証』の奥書に建長七年六月二十二日に専信房専海が書写したという記録が残っていたことが、生桑完明氏によって発表されている為、この時にはDに推敲されたと考えられる。⁽¹³⁾

以上の結果、AからDの「獲信見敬得大慶」部分における三回の推敲は、親鸞八十歳前後頃から八十三歳六月二十二日の間に施していることが分かる。そして、先述したように教忍宛消息の年期推定の根拠は少なく、確実視されるものではない。それらを踏まえても先行研究のいう建長三年もしくは七年と推定される教忍宛消息の年代と「獲信見敬得大慶」部分の推敲は年代的に見て、ちょうど一致するのである。

以上のことから、この部分の推敲は親鸞八十歳前後頃から八十三歳六月二十二日に施されていることを考えれば、時期的に見ても教忍宛消息の「慶喜」の字釈（正確に言えばそれに対応した教忍が親鸞に送った「慶喜」の質問）と関連性が高いと思われる。

五 結語

先行研究で関東門弟の法義理解の動揺と関連性を指摘される同名異本の変遷を手がかりに親鸞晩年期において「慶喜」の表現が同年代になされている理由を考察した。表現変遷が見られることから「正信念仏偈」とくに讃銘部分に着目した。「消息」という書物の特性上、「十二月二十六日」の日付から、建長三年もしくは七年と年期推定される先行研究をうけて、その関連性を見た。「尊号真像銘文断簡」に坂東本『教行信証』では抹消されている「見敬得大慶喜人」の文言があり、筆跡によって親鸞八十歳前後頃と考えられ、この部分の推敲は建長七年六月二十二日には施している。以上から時期的に見て、建長三年もしくは七年と年期推定される教忍宛消息が関連していると考えられる。このことから、教忍が親鸞に対して送った「慶喜」の質問が起因となり、晩年期にいくつかの「慶喜」の表現変遷が施されたものと考察した。

1 門川徹真『『唯信鈔文意』の書誌学的研究——流布本の特異性について——』（『真宗研究』四五号、二〇〇一年、一六二—一八二頁）などが同名異本の変遷と関東門弟の動揺との関連性について詳しい。

2 『浄土真宗聖典全書』二卷（以下、『浄聖全』二）、本願寺出版社、二〇一一年、八三二頁。

親鸞の年代における表現変遷の理由（玉 木）

3 多屋頼俊『親鸞聖人全御消息序説』真宗大谷派宗務所出版部、一九七四年、一五頁。宮地廓慧『御消息集』百華苑、一九七四年、五一頁参照。

4 専修寺本『教行信証』もしくは、現存しないその祖本となる専信本の可能性もある。

5 書物と門弟の関連性は、『浄聖全』二の解説を参照。

6 『浄聖全』二、六四九—六五五頁。

7 『浄聖全』二、七〇六頁の上段、下段、対校本と比較した。

8 『門侶交名牒』（『真宗史料集成』一卷、同朋舎出版、一九八三年、一〇〇八頁）。

9 常磐井和子「末灯鈔を読み解く二」『高田学報』八八号、二〇〇〇年、一頁—二三頁。

10 Aの文言と尊蓮書写本系統文明本の扱いについては、重見一行『教行信証の研究——その成立過程の文献学的考察——』法蔵館、一九八一年、一三五—一三六頁参照。

11 Bについては『親鸞聖人真蹟集成』一卷、法蔵館、一九七三年、一四七頁。Cの文言については『浄聖全』二、六五五頁。Cについては、先述したためここでは省略する。

12 安藤章仁「新発見の真仏書写聖教について」『印度学仏教学研究』五八巻二号、二〇一〇年、一〇九二—一〇九七頁参照。

13 生桑完明「高田伝来の教行信証真本について」『真宗研究』二号、一九五六年、一—一〇頁参照。研究が進み現在専信本を転写したものが現存の専修寺本であり、書写者は真仏と考えられている。

〈キーワード〉「正信念仏偈」、『尊号真像銘文』、「御消息」、慶喜

（龍谷大学大学院）